

1930年代における中央アジア探検

——ヘディンの「ロプ・ノール」探検を中心に——

田畑 久夫

1. はじめに
2. 20世紀前半の中央アジア探検史
3. 「ロプ・ノール」論争
4. ヘディンのみた「ロプ・ノール」
5. 結 語

キーワード：中央アジア探検、1930年代、
ヘディン、ロプ・ノール、さま
よえる湖、テラ・インコグニタ

1. はじめに

現在の飛行機・鉄道などに代表される近代的な距離克服の手段をまったく持たず、新聞・ラジオ・テレビなどのマスメディアの未発達な時代に、「テラ・インコグニタ」（Terra Incognita, 知られざる土地）に行くにはどうしたのであるか。目的地までには、大変長い

時間と労力が必要であった。そのため、危険や困難が多く、道中は不安なものであったに違いない。このような危険や困難があるにもかかわらず、我々は、未知なるものへの憧れが非常に強い。それは、我々に進歩を約束する「知的衝動」といえないこともないであろう。

かような「テラ・インコグニタ」に出発するのは、現在流行しているパッケージツアーや個人旅行とは異なり、旅行ではなく「探検」という名前で呼ぶものにふさわしいものであったと考えられる。我々は、かかる探検を実施することができた、恐らく最後の部類に入る探検家の代表として、ヘディン（Sven Hedin, 1865-1952）をあげることができる。すなわち、1930年代になると、探検においても、自動車は勿論のこと、飛行機を利用して踏査旅行を行なう計画がもたれるほどに、従来の徒歩あるいはラクダや馬に騎乗するという方法も様変わりしてきた⁽¹⁾。

(1)後述するように、ヘディンの最後の探検となる第五回探検の直前に実施された探検においては、当初ルフトハンザ航空会社所有の飛行機を利用して目的地に行くことにしていた。

金子民雄『ヘディン伝——偉大なシルクロードの探検者』中央公論社（中公文庫）、1998、91～96ページ。なお同書の親本（元版）は、同『ヘディン伝 偉大な探検家の生涯』新人物往来社、1972年であるが、文庫版にはごく一部に関して追記がみられる。

このように、ヘディンが探検に飛行機の利用を思い付いたのは、以下に述べるような時代背景が存在し

ていたためと思われる。すなわち、ヘディンがルフトハンザ機を使用して目的地に出かけようと企画したその年度（1927）に、バード（Richard Evelyn Byrd）が同僚のベネット（Floyd Bennett）と共に、スパーバル諸島のキングスベイ（King's Bay）から飛行機で北極点に到達したことや、翌年リンドバーク（Charles August Lindbergh）が‘Spirit of St. Louis’号に塔乗し、大西洋無着陸横断（ニューヨーク・パリ間）に初成功していることなどを考慮すると、ヘディンをはじめとして、多くの探検家・冒険家はほぼ同様のことを考えていたと想像できる。

このように、1930年代は探検の手段が大きく転換した時期に該当した。すなわち、1930年代に突入すると、ロンドン軍縮会議が開催され、日米を中心とする列強の軍備縮小が確認された。しかし、それにもかかわらず、翌31年には満州事変が勃興し、32年には満州国成立、上海事変開始というように、本稿の対象とする中国では、日本が本格的に植民地経営や侵略に乗り出した時期であった。それ故、ヘディンなどの探検は、事実上不可能であったり、実施しても非常に困難を伴った。かかる国際情勢の変化も、1930年代の探検には大きな影響を与えたのであった。

ヘディンが行なった「ロプ・ノール」の正体の解明を中心に実施した探検（1933～1934年）は、正式名称「新疆自動車探検隊」の一部として開始された。ヘディンは、かように晩年の探検においては自動車を利用した。しかし、その精神においては、従来から実施してきた探検同様、上述した意味での「探検」と呼ぶのにふさわしいものであった。

本稿では、ヘディンの探検を中心に、「謎の湖」ともいわれてきた「ロプ・ノール」について検討していく。

2. 20世紀前半の中央アジア探検史

中央アジアという言葉が科学的な意味に用いられるようになったのは、リッター（Karl Ritter）と共に現代（近代）地理学の祖と称せられる、フンボルト（Alexander von Humboldt）

が《L'Asie-Centrale, Recherches sur les Chaines de montagnes et la Climatologie comparée》3vols. (1843) を著わして以来であるといわれている⁽²⁾。しかし、中央アジアという用語が存在するにもかかわらず、用いる人々や研究者の間では、その範囲が明確に定義されてこなかった。

すなわち、一般に中央アジアと表現されている地域を、高地アジアあるいは内陸アジアと呼ぶ人々も存在する。かかる事情から、例えば、深田久弥のように、「中央アジア、そのルートは広い意味で東西交通路であり、そのヴァリエーション・ルートであるから、それをシルクロードと呼んでもさしつかえないだろう。最初に示したように、中央アジアがどの範囲をさすか、人々によって異なるが、わたしは東西交通路の通過する地域をすべてそのなかに含める⁽³⁾」、と主張し、その範囲を広くトルキスタン（カザフスタン、キルギス、ウズベキスタン、トルクメニスタンの総称）、中国雲南省、インド北辺のアッサム・ブータン・シッキム・ネパール、さらにパキスタン、アフガニスタン、イラン、イラクまでをも含む地域と看做した⁽⁴⁾。

以上の深田久弥に代表されるような非常に広大な地方を範囲とする見解も存在するが、本稿では、リヒトホーヘンが提案する自然地理学的区分を主体とした、「即ち古くから流出口のなかった盆地の相連続した内陸地域、換言すれば内陸水系の特徴をなす特殊の諸現象が完全に発達している地域である。全体の輪廓から言えば、

(2) von Richthofen, F. "China; Ergebnisse einer Reisen und darauf gegründete Studien" 5Bd, 1877-1912, Berlin. 同書の第1巻は、第3巻第1編と共に、下記のように翻訳されている。本稿ではこの翻訳によった。

望月勝海・佐藤晴生『リヒトホーヘン 支那I』岩波書店、1942、本文3ページ。

なお、フンボルトの中央アジア調査・研究に関しては、次の著書が詳しい。

西川治『地球時代の地理思想 フンボルト精神の展開』古今書院、1988、25～33ページ。

(3) 深田久弥『中央アジア探検史』白水社、1971、11ページ。

(4) 前掲(3) 11ページ。

南は西藏の高原から北は阿爾泰山脈に達し、西はパミールの分水界から東は支那の大河の分水界および興安嶺に達する⁽⁵⁾」範囲を中央アジアと看做すことにしたい。

上述してきた中央アジアに関しては、古くから漢民族の間では「西域」という名称で知られていた。西域という言葉が最初に漢籍史料に登場してきたのが『漢書』からである。一般に西域とは、以下のような地域をその範囲としてきた⁽⁶⁾。すなわち、西域とは、パミール高原を中央に、アラル海に流れ込むシルダリア・アムダリアの両河川に挟まれた広大な地域であるが、その中でも中心は、天山山脈と崑崙山脈間に位置する東トルキスタン地方（その大部分をタクラマカン砂漠が占める）とされてきた。なお、西域の左翼の東端は、本稿のテーマである「ロプ・ノール」が位置している。つまり、西域とはおおまかにいえば、東方の中国と西方のヨーロッパを結ぶ中継地域を称してきたのである。

このような範囲を西域と考えれば、前述した深田久弥が主張する中央アジアは、内モンゴル自治区、甘肅省、四川省など中国領をその一部に含んでいるが、かかる西域に近い概念であるといえる。

『漢書』では「匈奴伝」、「西南夷兩粵朝鮮伝」に次いで巻96上（列伝第66上）として「西域伝」が以下のように記載されている⁽⁷⁾。

皆在匈奴之西、烏孫之南。南北有大山、中央有河、東西六千餘里、南北千餘里、東則接漢、隄以玉門、陽関、西則限以葱嶺。

つまり、この文章によれば、西域は匈奴国の西側、烏孫国の南側に位置していると明確に、

その範囲を示している。その南北には、大山が聳えており、中央には河川が流れている。また、西域の面積も量的に記述されており、東西六千余里、南北は四千余里の広さを占めるとされる。東は玉門および陽関に、西は葱嶺によって限られている。以上の記述からも判明するように、文中の南北の大山とは、天山山脈と崑崙山脈であることが推定できる。それ故、中央部を貫流する河川は、タリム（塔里木）河となる。すなわち、当時において西域は、タリム盆地つまりタクラマカン砂漠を示したことになる。かかる範囲は、リヒトホーフエンが主張する中央アジアの範囲と近いことが分かる。

しかしながら、中央アジアは西域の場合でも同様であるが、長い間、文字どおり前章の表現を借りれば「テラ・インコグニタ」であった。つまり、中央アジアは、探検を必要とする代表的な地域だったのである。確かに、前漢の武帝（在位141～87B.C.）に西域進出を決定させ、シルクロードが公に開ける原動力となった張騫や、『漢書』を完成した班固の弟にあたる後漢の將軍班超は西域都護となり西域経営に進出した。さらには、唐代の仏僧で修業のため陸路インドに向かった玄奘三蔵、ベネチア生まれで父や叔父に連れられて陸路中国を旅行し、元朝に仕えたマルコ・ポーロなど、古代や中世においては、大探検家とでも称する部類に入る人々も多く輩出している。

しかし、科学的調査という視点から探検をみれば、15世紀が地理上の発見時代と称せられたように、航海に関してはいわゆる三大航海⁽⁸⁾が

(5)前掲(2)望月勝海・佐藤晴生訳、本文8～9ページ。

(6)西域の概念・範囲に関しては、以下の著作の記述をまとめた。

羽田明『世界の歴史10、西域』河出書房新社、1969、15～20ページ。

(7)『漢書』西域伝に関しては以下の書物によった。

班固撰・顔師古注『二十四史 漢書四』中華書店、1984、3,837ページ。

(8)ガマ（Vasco da Gama）のインドのアラバル海岸カリカット到着（1488年）、コロンブス（Christoforo Colombo）の新大陸への到着（1492年）、マゼランの世界周航（1519～1522年）をさす。

いずれも15世紀末から16世紀初頭にかけて実施されたが、大陸に関しては18世紀から開始されたといえる。その中でも、中央アジアの探検はおそく、本格的に実施されるようになったのは19世紀後半になってからであった。

上述したような意味における中央アジア探検は、地理学的調査により開始された⁽⁹⁾。かかる理由は、19世紀後半でさえも、カラコルムと崑崙との山系の区別が明確でなかったし、タクラマカン砂漠を貫流する河川に関する不明なものが大部分であった。したがって、当時とすれば、「テラ・インコグニタ」を歩き回り、1ヶ所1ヶ所丁寧に測量することで正確な地図を作成することが、探検のもっとも基本的な作業となったのである。それ故、この種の作業に熟練している地理学者あるいは地理学的な訓練を受けた探検家による、地理学的調査がとくに重視されたのである。

ロシアの地理学者セミョーノフ (Pyotr

Petrovich Semyonov, 1827-1914) がかかる意味での最初の探検家であると思われる。セミョーノフの青年時代は、ちょうどロシアで地理学の研究が組織的に行われるようになった時代に相当する。そして、1845年には、ペテルスブルグに「帝国地理学協会」が設立され、この協会の指導の下で、シベリアおよび中央アジアなど当時としては「テラ・インコグニタ」であった地方の探検が開始された。セミョーノフはこの頃まだ若輩であったが、1849年に「帝国地理学協会」の会長に選ばれ、1853年から3ヶ年にわたってドイツに留学した。そこで、ベルリン大学で地理学を講じているリッターの講義を受けることになった⁽¹⁰⁾。

このようになった理由は、留学する前にリッターの大著『アジア地理⁽¹¹⁾』のうち南シベリアと中国領内陸アジアの翻訳および補足を行っており⁽¹²⁾、書物からリッターを知っていたからであった。そして『アジア地理』の不徹底な部分

ㄨ 地理上の発見時代を含む発見航海の地理および歴史に関しては多くの書物が存在するが、いわゆる三大航海に関しては、以下の書物を参照した。

島田正彦『未知の大陸を求めてー発見航海の地理と歴史ー』大明堂、1997、40～106ページ。

(9) 以下の中央アジア探検家に関しては、とくに以下の書物を参考にして記述した。

前掲(3)309～542ページおよび前掲(6)39～66ページ。

(10) リッターは、1820年にベルリン大学地理学講座の主宰者となった。大学で地理学講座が開設されたのはドイツが最初であるので、リッターは世界で最初の大学における地理学講座の主宰者であるといえる。なお、19世紀前半に大学で地理学講座が存在したのは、同じくドイツのゲッティンゲン大学のみであった。

(11) 一般にはこのような名称あるいは単に『アジア』と呼ばれることが多い。かかる理由は次の通りである。つまり、リッターが1822年から死の直前(1859年)まで執筆した大著 *“Die Erdkunde, im verhältniss zur Natur und zur Geschichte des Menschen, oder allgemeine vergleichende Geographie, als sichere Grundlage des Studiums und Unterrichtes in physikalischen und historischen*

Wissenschaften” 2Auf. 19Bde. の第2巻以降がすべてアジアにあてられて記述されていたためである。同書は、第1巻アフリカ、第2巻以降アジア(第19巻まで)、その後アメリカに移るところで死去し未完成に終わっている。同書の内容に関しては、地理学をもって歴史学の解釈者としたといわれることになったほど、地理学史上では重要な位置を占める著作であった。かかる点について、野間三郎が主著の中で次のように論じている。

彼(リッターのこと——筆者註)の *Erdkunde* は一面に於て地表誌 *Oberflächenkunde* とよばれる如き山岳と水系の記述を主題にする側面があると同時に、それは近代的用語にいう歴史地理学としての側面をもっている。この側面は更に詳しく見るならばアフリカ、アジアにおける地理学的知識の歴史でもあるし、それを貫く主題として民族史の展開がある。

野間三郎『近代地理学の潮流—形態学から生態学へ—』大明堂、1963、104ページ。

(12) Semynov P.P. “Путешествие в Тянь-Шань” Москва, 1908, 樹木節訳『世界探検全集7 天山紀行』河出書房新社、1977、12～13ページ、なお、同書は1963年発行(ベースボールマガジン社)の再刊である。

すなわち空白箇所を自らの探検によって補おうと企てたのである。すなわち、ドイツ留学の翌年(1856年)から、天山山脈の周辺とくに「イシック・クル⁽¹³⁾」(Issyk kul')の探検に従事した。当時まで、セミョーノフが探検を行なった天山山脈を主体とする地域は、七世紀にこの地に足を踏み入れた玄奘三蔵が著した『大唐西域記』が「信頼しうる最初の、そして唯一のもの⁽¹⁴⁾」とされていたほどであった。当時、フンボルトが提唱したように、天山山脈の主峰ハン・テングリ山⁽¹⁵⁾(6,995メートル)付近には氷河がみられ、さらに主峰自体が活火山であると看做されていたために、山脈が火成岩より構成される火成説をとるのが主流であった。しかし、セミョーノフが現地に出かけ、天山山脈を構成する岩石を直接観察した結果、山脈中にはまったく火成岩が存在していないことが判明した。それ故、天山山脈も火山でないことが証明されたのである。

その後、セミョーノフは天山山脈の探検・調査⁽¹⁶⁾によって、前述したように「帝国地理学協会」会長となり、多数の探検家を育成・援助し、

ロシアの中央アジア大探検時代を築きあげた。セミョーノフに次ぐロシアの探検家としては、探検家中の探検家と称されたプルジェヴァリスキー(Nikolai Mikhailovich Przhevalskii 1839-1888)があげられる。プルジェヴァリスキーは当初軍人を志望し、陸軍大学に入学した。そして、大学の卒業論文として「アムール地方の軍事的統計的概説」を提出したが、その論文が認められて「帝国地理学協会」会員に推薦された⁽¹⁷⁾。卒業後は、ワルシャワ士官学校で歴史と地理、地理的発見史などの科目を教えた。プルジェヴァリスキーは、この頃になると当初の目標であった軍人としての昇進を熱望しなくなり、探検家を目指すようになっていた。その後、東部シベリアの転勤を願い出て、数ヶ年シベリアで勤務することになった。そこで、主としてウスリー地方⁽¹⁸⁾の探検・調査に従事することができた。その成果は『ウスリー紀行⁽¹⁹⁾』と題して1870年に出版した。この最初の著作が上述したセミョーノフに認められ、以降中央アジアの探検に従事することになった。その理由は、プルジェヴァリスキー自身が元々中央アジア探検を

(13)現在キルギス共和国に所属しているこの湖は、日本においては「イシク・クル」(湖)、「イシク・クル湖」、「イシククリ湖」などと称されている。本稿においては「イシク・クル」と統一しておいた。

(14)前掲(6) 41ページ。

(15)セミョーノフの時代、天山山脈の最高峰は本文で示したように、ハン・テングリ山であった。当時ハン・テングリ山の標高は7,430メートルとされていた。しかし、1934年にパペータ山(7,439メートル)が発見され、この山が最高峰となった。

前掲(3) 321ページ。

(16)セミョーノフの天山山脈付近の探検の大成功を非常に喜んだ当時のロシア皇帝は、その姓にチャンシヤンスキーの呼称を加えることを許した。つまり、セミョーノフ・チャンシヤンスキーと名乗ってもよいことになった。周知のように、ロシア語チャンシヤンスキーは天山を意味した。

例えば前掲(6) 41~42ページなど多くの書物にこ

の挿話が掲載されている。

(17)加藤九祚の下記の書物の解説によると、プルジェヴァリスキーの卒業論文の題目は「アムール地方」であった。「アムール地方の軍事的統計的概説」は、その後「帝国地理学協会」に提出されたものであるという。

Przhevalskii, N. *“От Кяхты на истоки Желтой реки исследование северной окраины Тибета и путь через Лоб-Нор по бассейну Тариха,”* С. Петербург, 1888, 加藤九祚訳『世界探検全集 9 黄河源流からロブ湖へ』河出書房新社、1978、355~356ページ。なお同書は、『西域探検紀行全集 2 第一部黄河源流からロブ湖へ』白水社(1967年)の再刊である。

(18)アムール川の支流ウスリー川の上流域で、ハンガ湖などの湖がある。1860年の北京条約で最終的にロシア領となった地域で、日本では沿海州と呼ばれている。

(19)本書は、次にみられるように翻訳されている。

姉川盤根訳『ウスリー紀行』大連日日新聞社、1943。

することを希望していたからである。

プルジェヴァリスキーは、中央アジアに関しては合計4回探検を実施している。すなわち、第1回(1870~1873年)は、モンゴル、甘粛省、青海省、北部チベット地方を中心とした探検を行なったが、その中心はモンゴルであった。そのため、この探検は一般に「蒙古探検」と称されている。また探検中に、鳥類・昆虫・植物などの標本、大小哺乳類の毛皮などを非常に多く収集したことなどから、その探検紀行⁽²⁰⁾が出版されると、大反響となった。

第2回探検(1876~1877年)は別名「ロプ・ノール紀行(探検)」と称されるものであった。この探検は、中央アジアの中国とロシアとの国境の町クルジャから天山山脈を経由し、「ロプ・ノール」に向かい、アンティン・ターグ山脈に達した。そこから帰路カシガルを経て、出発点クルジャに戻って来るというコースであった⁽²¹⁾。かかるコースは、その後ヘディン、大谷探検隊など多くの中央アジア探検隊が踏破するコースとなったが、当時としては画期的なものであった。この探検の最大の成果は、名称だけが知れわたっていた「ロプ・ノール」を発見したことであり、そのことによって後述するように「ロプ・ノール」論争の口火が切られたのである。

続く第3回探検(1879~1880年)および第4回探検(1883~1885年)は、それぞれ「第一次チベット探検」、「第二次チベット探検」と称されている。両探検とも、中央アジアへの入口は、

ザイサン、ウルガ(現在のウランバートル)と異なっているが、目的は北部チベット地方であったので、かように名付けられた。第3回探検では、南山山脈の南方に2つの新しい山脈を発見し、北に位置するものをフンボルト山脈、南に横たわるものをリッター山脈と命名したりするが、最終目的であるチベット仏教の聖地であるラサに入ることができなかった。第4回探検は、規模としては非常に大規模で、バイカル湖の方からモンゴリアを縦断し、青海省からチベットへ、その後、「ロプ・ノール」を調査し、ホータン川に達する。そして、さらにタクラマカン砂漠を横断し、天山山脈を越えて「イシック・クル」に出て来るというコースであった⁽²²⁾。その成果は、「シャリン・ノール」と「オリン・ノール」という二つの湖の発見や、「プルジェヴァリスキー山脈」(アルカ・タグ山脈)、「グルスキー山脈」(ウズ・タグ山脈)などの崑崙山脈に所属する新しい山脈群を発見したことであった。

少年時代にプルジェヴァリスキーの探検記を愛読していたのが、コズロフ(Pyotr Kuzimich Kozlov, 1863-1935)であった。その後、コズロフは偶然プルジェヴァリスキーに出会う。プルジェヴァリスキーはコズロフの誠意と情熱を感じとり、自身の最後の探検である、第4回中央アジア探検の助手に彼を抜擢した。このようにして探検技術をマスターしたコズロフは、以降「帝国地理学協会」が派遣

(20)Przhevalskii, N. *“Монголия страна Тангутов”* С. Петербург, 1875, 同書は英・仏・独の各国語に訳されている。またわが国においても英訳からの重訳であるが次のように訳されている。田村秀文・高橋勝之訳『蒙古と青海 上・下』生活社, 1939。

(21)Przhevalskii, N. *“От Кульджи за Тянь-шань и на Лоб-нор”* 1877 С. Петербург. なお同書の英訳からの翻訳が次の書物である。

中野好之訳『クルジャから天山を越えてロプ・ノールへ』、(西域探検紀行全集、第二部)、白水社、1967年、所収。

(22)この探検の成果は、次の書物となった。前掲(17)Przhevalskii, N. (1888)

なお、プルジェヴァリスキーはこの探検の直後、カラコルム地方で流行していた腸チフスにかかり死去した。

する探検隊の中心人物となっていた。彼は「モンゴル・チベット探検」(1889～1901年)を皮切りに、「モンゴル・四川探検」(1907～1909年)、「ケンタイ・ハンガイ探検」(1923～1926年)と各々称されている大規模な探検を実施した。「モンゴル・チベット探検」は、アルタイ山脈からゴビ砂漠を南下し、南山山脈麓に位置するココ・ノール周辺を探検した。その後さらに南下を続け、長江とメコン川の上流地域を調査した後、北方に引き返し、ウルガに戻って来た。この探検において、モンゴル、アルタイ山脈、東部チベット(カム地方)などの山岳誌、地質、気象などに関する多くの資料を提供した⁽²³⁾。以上の功績に対して、「帝国地理学協会」は協会の最高賞を意味するコンスタンティノス賞牌をコズロフに贈った。

次ぐ第二次探検(「モンゴル・四川探検」)も第一次探検同様に、「帝国地理学協会」から探検隊を委任された探検であった。今回の探検においても多大の成果をあげたが、特筆すべきものとしては、ゴビ砂漠南端のアラシャン砂漠に位置するカラホトの廃墟を発見し、その発掘を行ない成功したことがあげられる。すなわち、そこで「モンゴル・四川探検」隊は、約三千点の古文書や冊子、三百点以上の仏画などを収集することができた。中でも、収集した古文書や冊子は西夏文字解読の貴重な資料となった⁽²⁴⁾。

第三次探検「ケンタイ・ハンガイ探検」に入る前に、コズロフはラサを中心とする南チベット探検の準備を終了し、ラサへの入城が目前のところまで来ていた。しかし、この計画は破棄せざるを得なくなった。理由は、当時ロシアの

チベット進出・接近を恐れたイギリスが、コズロフ探検隊のチベット入りに対して嚴重な抗議をしたためである。そのようなことから、コズロフは探検先を南チベットからモンゴリアへと方向転換したのである。このモンゴリアを主体とした探検が、前述の「ケンタイ・ハンガイ探検」である。今回の探検での最大の成果は、ケンタイ山脈中に位置するノイン・ウラにおいて、合計212基にもものぼる匈奴の墳墓を発見し、その一部を発掘したことである。この発見・発掘は、匈奴文化史上不滅の功績を残したと称されるほど価値の高いものであった。すなわち、ノイン・ウラの発見・発掘は、第二次探検(「モンゴル・四川探検」)で行なったカラホト廃墟跡の発掘と共に、20世紀前半における最大級の考古学的成果の一つであるといわれた。

以上論じてきたように、コズロフの探検の特色は、「いままでの地理学的探検に考古学的調査を加え、各地域の歴史研究に貴重な資料を提供した。」⁽²⁵⁾と非常に高い評価が下された。かような輝かしい成果をあげたコズロフの探検は、その後ロシア人探検隊が中央アジアにおいてすぐれた業績をあげる先駆となったものと位置づけることができよう。

上述してきたセミョーノフ、プルジェヴァリスキー、コズロフと続くロシア人の中央アジア探検家と争ったのが、ヘディンおよびスタイン(Sir Mark Aurel Stein, 1862-1943)などであった。

ヘディンは、現在においても中央アジア探検の第一人者と目されている探検家である。周知のように、ヘディンの出身であるスウェー

(23)この探検の成果は次の書物によった。

Kozlov, P. K. "Монголия и Кам" С. Петербург, 1905～1906.

(24)Kozlov, P. K. "Монголия и Амдо и Мертвый

Город Хара-Хото" Отгиз, 1923. なお同書の独訳からの重訳が西義之『西域探検紀行全集11 蒙古と青海』白水社、1967である。

(25)前掲(3) 388ページ。

デンは、ノルデンショルド (Nils Adolf Erik Nordenskjöld, 1832-1901) やアムンセン (Roald Amundsen 1872-1928) に代表されるように、伝統的に北極海探検を企てた探検家が多数輩出した国家として有名である。

ヘディンも幼少時代、ノルデンショルドがヴェーガ (Vega) 号を指揮して欧亜大陸北東航路を突破して無事帰国した成功などに大きく影響されて、極地探検に目ざしたこともあった。しかしその後、彼の探検の関心は中央アジアに移った。かかる理由は種々存在するといわれているが、家庭教師時代コーカサス・ペルシアなどを単独で旅行したことが原因の一つといわれている⁽²⁶⁾。その後、ストックホルム単科大学およびウプサラ大学で地質学と地理学を学習した。しかし、中央アジア探検を科学的に行なうには、中央アジアに関する地理学的な理論的裏づけの必要性を痛感するに至り、若いときから中国を実施踏査した経験をもつベルリン大学リヒトホーフ教授 (Ferdinand, Freiherr von Richthofen 1833-1905) の下で地理学を勉強

することにした。

しかし、ベルリン大学での学業は一時中断に追い込まれることになった。すなわち、ヘディンは、かつて探検旅行をした経験をもつなどの理由から、スウェーデンのペルシア派遣使節団の通訳官に任命され、同行することとなった⁽²⁷⁾。トルコにおいて、通訳官の仕事を無事に終了したが、ヘディンはその後も約一年間にわたってペルシアからロシア領中央アジア経由、カシガルまで出かけた。帰国後は再度ベルリン大学に復学し、地理学を主体とする勉学に励んだ⁽²⁸⁾。

ヘディンが上述したコーカサス地方およびペルシアを中心とした探検旅行を除いて、本格的に中央アジア探検に乗り出したのは、1893年から1897年にかけて実施された探検からである。かかる探検は一般に第1回中央アジア探検と称されているもので、ヘディンは以降5回にわたって中央アジアを主体に探検に従事した。

すなわち、第1回中央アジア探検は学位請求論文⁽²⁹⁾をハレ大学に提出した直後から、探検に関する構想を練っていた。しかし、眼病と資金

(26)正確にいうと、1886年および1890年の2回中央アジア探検を実施している。とくに後者の探検では、カシガルで中央アジア探検史上大変著名なインド生まれのイギリス人ヤングハズバンド (Sir Francis Edward Younghusband, 1863-1942) や、ヤングハズバンドの通訳を務めたこともあり、晩年にはイギリスの外交官として活躍したマカートニ (Sir George Macartney, 1867-1945) などと遭遇し、知友となった。

(27)深田久弥はその著 (前掲3) 394ページ) において、スウェーデンのペルシア派遣使節団の通訳としての探検旅行をベルリン大学でのリヒトホーフ教授の下での留学よりも先にに行ったと述べている。しかし、次の解説にもみられるように、正確には本文で後述している如く、ベルリン大学での学業を一時中断して、ペルシア地方の探検旅行に同行したのであった。

Hedin, S. "Der Wandernde See" Brockhaus, 1937 鈴木啓造訳『さまよえる湖』旺文社 (旺文社文庫)、1975、360ページ。

なお、同書は上述の鈴木啓造訳をはじめ、数種類の訳本が出版されており、それぞれの出版には工夫がみ

られる。しかし、写真のみ若干省略されているが、鈴木訳が原本にもっとも忠実・正確に訳していると思われるので、以降本稿では同書を引用する場合、鈴木訳によることにする。

(28)ヘディンのドイツ時代の回想は、次にみられるように最初ドイツ語で出版された。Hedin, S. "Funfzig Jahre Deutschland" Berlin, 1938.なお、同書の中で、リヒトホーフに関する部分 (第3章~第5章) のみがわが国にも翻訳されている。高山洋吉訳『リヒトホーフ伝』慶応書房、1941。

また、同書の抄訳としては道本清一訳『独逸への回想』青年書房、1941がある。

(29)リヒトホーフは1886年よりベルリン大学地理学講座教授に就任しており、当時ドイツ地理学会の指導的地位を占めていた。しかし、ヘディンが博士論文を提出しようとした当時 (1892)、公私にわたり多忙だった。そこで、リヒトホーフの指示と推定されるが、それにより、キルヒホーフ (Alfred Kirchhoff, 1838-1907) の下に学位請求論文を提出した。水津一朗によれば、キルヒホーフは基本的な考え方がリヒト

難から予定はかなり遅れたものとなった。コースは、ロシア領から中国領トルキスタンに入り、カシガルを拠点とした調査を試みた後、タクラマカン砂漠周辺調査に従事した。しかしここでは、従者二名が犠牲となる偶発事故が発生し、ホータン川に到着するのが精一杯であった。その後天山南北を縦横し、ダンダン・ウイリクの遺跡を発見・調査した後、東方に位置する「ロプ・ノール」付近などの調査も行なった。そして、チベット高原に進み、青海省・甘粛省を経由して最終地点北京に到着した。この探検は3ヶ年にも及ぶ長期間にわたり、測地距離は1万498キロメートル、その内約3分の1は「テラ・インコグニタ」であった⁽³⁰⁾。なお、当時中国は清王朝末期で、日清戦争の敗北から数ヶ年しか経過していなかった。北京では、李鴻章とも会見している。

第2回中央アジア探検(1899-1902)は、前回の探検から2年後に開始された。ヘディンは、このように非常に短期間で次回の探検を行なうことにしたのであるが、その間にも種々の著しい活動を行なっている。例えば、前回の探検の最終地点北京からベテルスブルグ経由で帰国したその年末(11年)には、ドイツ・イギリスを歴訪しているという状態である。そして、後者においては、「王立地理学協会」で講演を行なっている。このようにして、当時からヘディンは、地理学者として国際的に認知されるようになった。

今回のコースは、第1回中央アジア探検と同様、ロシア領から中央アジアに向った。すなわ

ち、カスピ海を渡り、パミール高原を越えてカシガルに出た。目的地点は「ロプ・ノール」であった。理由は、恩師であるリヒトホーフェンとプルジェヴァリスキーとの間で論争されていた「ロプ・ノール」の位置問題に決着を付けたいと考えていたからであった。そのため、カシガルから東方にタクラマカン砂漠北部つまり天山南路を進み、タリム川上流(ヤルカン川などと称される)を舟で下って「ロプ・ノール」に到達しようとした。しかし、タリム川が凍結したため、航行することを断念し、陸路で「ロプ・ノール」を目ざした。その途中、同行しているヘディンの使用人の一人が新たな遺跡を発見した。これが楼蘭遺跡である。ヘディンは、この遺跡を調査した結果、楼蘭は「ロプ・ノール」が移動し、それに伴って湖水が消滅したため、水不足が主原因で廃墟と化したものであると確信した。すなわち、このことから「ロプ・ノール」は、「さまよえる湖」であるという推論を打ち立てることになった。

しかし、楼蘭遺跡の本格的な発掘調査は、当時ヘディン一行が飲料水不足に悩んでいたため一時見送り、さらに南下を続け、東部チベット地方探検を先にすることにした。その後再度楼蘭に戻り、住居址や寺院の平面図を作成したり、多くの古文書を発見した。また、埋れていた仏像や寺院の装飾品も多数掘り出すことに成功した。これらの作業が一応終了すると、チベットの聖都であるラサに向った。ラサは長い間禁断の都であり、世界中の探検家の憧れの地でもあっ

↘ホーフェンに近く、自然地理学を基盤とした地誌学的研究を目ざしたとされる。提出した博士論文は、ペルシアの高峰デマベント山に関する自然地理を主体とする地誌的内容であったという。

水津一朗『近代地理学の開拓者たち』地人書房、1974、114ページ。

(30)第1回中央アジア探検の成果は、次の著作などとし

て刊行された。

Hedin, S. "Die Geographisch-wissenschaftlichen Ergebnisse meiner Reisen in Zentralasien 1894-1897", 1900.

Hedin, S. "Durch Asiens Wüsten" Leipzig, 1910, 横川文雄訳『アジアの砂漠を越えて 上・下』(ヘディン中央アジア探検紀行全集1・2)白水社、1964、など。

た。しかし、チベット側の強い拒否に会い、結局ラザ入りは失敗に終わった。そこで、インド經由カシガルに出、そこからロシア経由で帰国した⁽³¹⁾。

第3回中央アジア探検(1905~1908)は、前回の中央アジア探検と同様に、スウェーデン国王オスカルからの援助を受けて実施された⁽³²⁾。今回の探検の最大目標は前回訪問することができなかったチベットの聖都ラサを訪れることであった。そこで、まずペルシアを経由してインドに向った。インドに最初に行ったのは、インドで、チベット地方に入る許可書を入手する必要があるからであった。しかしながら、インドでは旧知の総督が既に退いており、チベットへの許可書は入手することができなかった。そこで、非常手段をとり、東トルキスタンに向かうと装ってチベットに潜入した。

一時はチベットからの退去を迫られるということもあったが、シガツェ周辺などを調査することができた。その後、再度チベット退去を命じられたりしたが、ツアンボ川上流・スナサロール湖・聖山カイラスなどの調査を行なった。しかし、最終目標であった聖都ラサには入城でき

なかった。この間での探検の最大の成果は、ヒマラヤ山脈の北側に、ちょうどヒマラヤ山脈と平行して走る山脈が存在することを発見したことである。ヘディンは、かかる山脈を「トランス・ヒマラヤ」と名付けた。その後、サトレジ川上流などを探検しながら、インドの出発点となったシムラに戻ってきた⁽³³⁾。

なお、インド滞在中に日本地学協会の招請を受け、来日した。日本では明治天皇などとも会見し、勲一等瑞宝章などを授けられている。ヘディンはその後朝鮮半島・満州(中国東北地方)を旅行し、シベリア経由で本国に帰国した。帰国すると、ヘディンの探検に注目していたヨーロッパ諸国の地理学会は、こぞって彼を招待したので、各国の首都などにおいて講演を行なった。そのことなどから、多くの国において金メダルなどが贈呈され、彼の探検家としての名誉が称えられた⁽³⁴⁾。しかし、1914年に勃興した第一次世界大戦開始前後から、各国では戦争に対する不安が生じはじめた。その影響を受けて、母国スウェーデンの中立を守る立場を強固に主張したヘディンは、その結果以前に会員となっ

(31)第2回中央アジア探検の成果は、次の著作などとして刊行された。

Hedin, S. "Im Herzen Von Asien, Zehntausend Kilometer auf Unbekannten Pfaden" 2Bde, Leipzig, 1903.

Hedin, S. "Scientific Results of a Journey in Central Asia 1899-1902" text 6vols, maps 2vols. Stockholm, 1904~1907.

Hedin, S. "Abenteuer in Tibet" Leipzig, 1904.
鈴木武樹訳『チベットの冒険』(ヘディン中央アジア探検紀行全集3)白水社、1965など。

(32)例えば、次の書物の付図に代表されるように、ヘディンの第3回中央アジア探検の開始年代を1906年とすることが多い。しかし本稿では、祖国スウェーデンを出発した年度が1905年10月16日であったので、1905年とした。かように、多くの書物が第3回中央アジア探検の開始年代を1906年とするのは、後述の註(33)に示したように、その探検の報告書が1906年から1908年となっ

ているためと思われる。

前掲(3)395ページ付図。

(33)第3回中央アジア探検の成果は、次の著作などとして刊行された。

Hedin, S. "Southern Tibet Discoveries in former times compared with my own Researches, in 1906-1908" text 9vols, maps 3vols, Stockholm, 1916~1922.

Hedin, S. "Transhimalaja" Wiesbaden, 1951.

青木秀男訳『トランスヒマラヤ 上・下』(ヘディン中央アジア探検紀行全集4・5)白水社、1965年など。

(34)ヘディンは、ベルリン・ウィーン・パリ・ロンドンなどで講演を行なった。また、これまでのヘディンの中央アジア探検に対して、スウェーデン地理学会はヨハン・アウグスト・ワールベリ金メダル、ベルリン地理学会はフンボルト金メダル、イタリア地理学会も同様に金メダル、さらにイギリスはインド帝国上級勲爵士(K. C. I. E)に任命した。

た外国の学会から除籍されるということもあった⁽³⁵⁾。

第一次世界大戦後の1922年、はじめてアメリカ合衆国を訪問した。アメリカではニューヨーク・シカゴなどの主要都市を歴訪した後、大陸を横断し西海岸に出、そこから再度東京を訪れた。当時東京は関東大震災の直後であった。東京からは中国に向った。中国では辛亥革命で成立した共和制が布かれていた。しかし、その政権は軍閥によって奪われ、訪問した後北京は軍閥によって支配された。その後、モンゴル経由モスクワ鉄道に乗り込んでロシアを横断し、帰国した。この旅行は、ヘディンの最初の世界一周旅行であった⁽³⁶⁾。

第4回中央アジア探検(1927～1933年)は、別名‘Sino-Swedish Expedition’(「西北中国科学考察団」)と称された。この探検隊の中心はヘディンであったが、スウェーデン・ドイツ・オランダおよび中国の研究者60名から構成される大組織であった。しかし、このように非常に大規模な探検隊は、当時故孫文の遺志を受け継いだ民族主義に目ざめた中国民衆の意向を無視した形で実施された。つまり、ヘディンが今回の探検の交渉相手に選んだのは、軍閥張作霖が掌握していた政府だった。

コースとしては、包頭から新疆省(現在のシンチャン・ウイグル自治区)の首都ウルムチを目指した。ウルムチに行ったのは、今後の探検の交渉や、既述したことがあるが、今回の探検当初から計画していた飛行機による中央アジア探検の許可を入手するためであった⁽³⁷⁾。しかし、新疆省内での探検の許可はおりたが、後者の件に関しては不許可となった。そこで、ヘディンのみが一時本国に帰り、その対策を講じることにした。ところが、ヘディンの話を聞いた飛行機を提供するはずであったルフトハンザ社は、この件から手を引くことを決定した。そのため、この計画は中止せざるを得なくなった。

以上述べた経過などもあり、ヘディンを除いた一行が徒歩でウルムチからゴビ砂漠を横断することにした。その途中、トルファンでタリム川の流路が最近変化し、それに伴い「ロプ・ノール」の位置が以前とは異なっているという、噂を聞いた。そこで、一行はその事実を確認すべく「ロプ・ノール」に足を進めた。そして、はるか以前に存在していた場所に「ロプ・ノール」存在することを発見した。しかし、その後、新疆省の動乱が激しさを増加したので一行は探検を中止し、引き返すことにした。

このように、今回の探検は大規模なものであ

(35) ロシアがバルト海に海軍を増強しつつあった。これをヘディンは祖国スウェーデンの威圧と考え、パンフレットを発行するなどして国民にロシアの脅威を訴えた。このため、ロシアとヘディンとの友好関係が冷却し、ロシア皇室地理学会から除籍された。また、第一次世界大戦が開始されると、ドイツとの友誼関係を強め、度々ドイツを訪問した。そのため、イギリスは王室地理学会からヘディンを除籍した。

なお、ヘディンとドイツとの友誼関係は第二次世界大戦まで継続した。その理由は、スウェーデンの中立政策をなんとしても厳守し、戦争に巻き込まれないためにも情報を収集する必要があったためであるとされる。そのため、ヒットラーを信じるまでになっていたという。この間の事情については次の書物が詳しい。

金子民雄『納められたベルリン使節 ヘディンのナチ・ドイツ日記』胡桃書房、1986。

(36) 当時ロシアには、ソヴェト政権が樹立されていた。そのため、ロシア内の横断が可能となった。

(37) 当時新疆省でも政府が不安定であった。つまり、新疆省においては省長・督弁とともに北京政府によって任命されていたが、それは名目上のことにすぎなかった。ヘディンは、督弁楊增新から省内の科学的調査を行なう許可を得た。その後楊増新が暗殺され、金樹仁がその跡を継いだ。しかし、かかる事件を契機として、省内を中心にイスラム教徒(回族)の反乱が起こったが、南京におかれていた政府はその内乱を終結させることができなかった。

たにもかかわらず、中途半端に終了した。しかも、ヘディンが直接指揮をとることができなかった。といっても、上述してきたように「ロプ・ノール」が移動しているという事実を発見しただけでも大収穫であった。

そこで直ちに出発の準備にとりかかった。この探検が第5回中央アジア探検(1933~1935年)である。しかし、ヘディンが新疆省に到着するや否や、数年前から続いていた大規模な動乱に再度巻き込まれることになった。今回は南京政府の探検許可を得ていたが、それがまったく効力を発揮しなかった。そのため、探検隊は至るところで停止・軟禁され、隊員たちの生命の危険を感じるという状態であった。かような条件下で、自動車による探検隊が十分に調査・探検するというわけにはいかなかった。それでも、ゴビ砂漠に自動車道路を建設することが不可能に近いという結論に達することができた。

以上述べたように、今回の探検の当初の目的であった自動車による探検は、結局途中で放棄せざるを得なかった。しかしながら、ヘディン

は、タリム川をカヌーによって「ロプ・ノール」に到着することには成功した。それ故、ヘディンは今回の探検の本来の目的を達成したことになった。つまり、ヘディンは後述するように、自説すなわち「ロプ・ノール」が移動するという仮説が実証されたという確信をもったのである⁽³⁸⁾。

中央アジアに関しては、イギリスもインドを植民地としている関係から、この地域については大変強く関心を有していた。イギリスを代表する中央アジア探検家としては、スタイン(Sir Mark Aurel Stein 1862-1943⁽³⁹⁾)があげられる。スタインは3回にわたって中央アジア探検を実施している。

すなわち、第1回探検(1900~1901年)は、数人の使用人と地図制作に従事するインド人測量家⁽⁴⁰⁾を同行して実施された。コースは、カシミールの中心都市スリナガルを出発し、ヒマラヤ山脈を越えて中央アジアの入口カシガル⁽⁴¹⁾に到着した。カシガルに入る直前に、スタインは、「氷の山の父」という名称をもつムスター・ア

(38)第4・第5回中央アジア探検の成果は、次の著作などとして刊行された。

Hedin, S. *“Reports from the Scientific Expedition to the North-Western Provinces of China under the Leadership of Dr. Sir Hedin”*, Hedin, S. *“History of the Expedition in Asia (Publications of 23, 24, 25, 26) 4vols, 1943~1944*所収。

Hedin, S. *“Auf Großer Fahrt”* Leipzig, 1929, 羽島重雄訳『ゴビ砂漠横断』(ヘディン中央アジア探検紀行全集6)白水社、1964など。

Hedin, S. *“Rätsel der Gobi”* Leipzig, 1931, 福田宏年訳『ゴビ砂漠の謎』(ヘディン中央アジア探検紀行全集7)白水社、1965など。

Hedin, S. *“Die Flucht des Großen Pferdes”* Leipzig, 1935, 宮原朗訳『戦乱の西域を行く』(ヘディン中央アジア探検紀行全集8)白水社、1965など。

Hedin, S. *“Die Seidenstra e”* Leipzig, 1936, 西義之訳『シルクロード』(ヘディン中央アジア探検紀行全集9)白水社、1965など。

(39)出身はハンガリーの首都ブダペストである。ウィー

ンおよびチューリンゲンの大学で学んだ後、イギリスに留学した。イギリスでは、オックスフォード大学に進み、考古学を専攻した。第1回探検後の1904年にイギリスに帰化した。

(40)ラム・シンである。ラム・シンはインド検査主任より派遣されたグルガ族であった。ラム・シンは、今回スタインの探検に同行する前に、同じく同行することとなった料理兼雑役係のジャスヴァント・シンと共に、ヤルカント川水源の地図作成隊員として崑崙山脈を探検した経験を有していた。なお、ラム・シンは、その後毎回スタインと行動を共にし、スタイン探検隊には欠かせない役割を担った。

Mirsky, J. *“Sir Aurel Stein; Archaeological Explorer”* Univ. of Chicago Press, 1977, 杉山二郎・伊吹寛子・瀧梢訳『考古学探検家 スタイン伝(上)・(下)』六興出版、上巻、1984、154ページ。

(41)当地には、当時イギリスとロシアの両国公使館があり、中央アジア探検ではもっとも有力な拠点の一つであった。

タ(7,424メートル)に試登している⁽⁴²⁾。スタインは、結局気象不良と時間不足で登頂することができなかったが、昔からこの地方を通過する旅人たちにとっては、この山が最初にみえろと、ひざまずいて祈りを捧げたという、カイラス山と共にもっとも神聖な山であったからである。

カシガルからホタンに向った。スタインはホタン拠点として、南に広がる崑崙山脈や北方のタクラマカン砂漠周辺の遺跡を調査・探検した。その後、さらに足を東方に進め、1896年にヘディンが発見したダンダン・ウィリクの遺跡の発掘を行なった。ダンダン・ウィリクの放棄された年代が不明だったためである。スタインの今回の発掘で、発見された古文書などからその年代は781年から787年の間であることが判明した。さらに、ニヤの遺跡を発見し、発掘を行なった。ニヤにおいては住居・寺院址や美術品などの発掘もしたが、カローシュティ文字で書かれた多数の木簡を発見したことが最大の成果であった。その後、一行は東方に進み、エンデレの古代遺跡を発見、発掘した。エンデレの遺跡の発掘が終了すると、再度同じ道を引き返しカシガルに戻った。そして、ロシア領トルキスタンを経由してカスピ海を横切りバクーに出た。バクーからは汽車に乗り継いでロンドンに帰った後、任

務地であるインドに行った⁽⁴³⁾。

第2回探検(1906～1908年)の出発点もカシミールからであった。コースは、最初カシミールからカシガルに向ったのであったが、今回の探検では、前回許可がおりなかったワンハ谷などを通過することができた。その先カシガルからホタンまでのコースも前回と同じ道をとった。その後、ニヤの遺跡を再訪問し、精力的に発掘を試みた。発掘が一段落するとさらに東方に足を進め、チャルクリフに到達した。チャルクリフの町はかつて非常に栄え、人口も多かった。しかし現在では、人口も少なく寒村となっていた。この町がロブ砂漠の入口である。一行はロブ砂漠を縦断するように北に進み、楼蘭の遺跡を訪れた。楼蘭遺跡も、既述したようにヘディンがはじめて発見した遺跡の一つであった。スタインも埋れている遺跡の発掘にとりかかった。その結果、古都の構成が明確になったのをはじめ、多数の埋蔵品を入手することができた。その後、再びチャルクリフに戻り、前回の探検で発見・発掘したミールラの廃墟を今回は徹底的に発掘した。発掘が終了すると、再度東方に向い、玉門関を経由して敦煌に到着した。敦煌では、千仏洞を調査し、古文化財の宝庫としての敦煌の名前を世界中に知らしめた⁽⁴⁴⁾。敦煌より安西に出、ゴビ砂漠を横断した。その後、ハミ・

(42)ヘディンも1894年、ムスター・アタに試登している。ヘディンの場合も途中で大吹雪に龍われ、6,300メートルまで達したが登頂を断念した。スタインもヘディンと同様に西麓から氷河を登り、6,100メートルまで進んだ。

(43)第1回探検の成果は、次の報告書として刊行されている。

Stein, M. A. "Sand-Bured Ruins of Khotan, Personal Narrative of Journey of Archaeological and Geographical Exploration in Chinese Turkistan" Hurst and Blackett, Ltd., 1904, London なお、同書の一部(第15章～第26章)

は以下の書物にみられるように翻訳されている。

松田寿男訳『コータンの廃墟』(世界ノンフィクション全集10) 筑摩書房、1955。

(44)スタインは千仏洞調査の際、千仏洞の秘密の石窟の番人を買収して、29箱にも及ぶ経典など、貴重な文物を多数持ち帰ったされる。

前掲(3) 426～427ページ。

このことが、杉山二郎が指摘するように、とくに中国人研究者の反感を買い、スタインを新疆文物の破壊者・略奪者などと呼ばれ、非難を強く受けることとなった。

前掲(40) 372ページ。

トルファン・クチャなどタクラマカン砂漠を横断し、ホタンに到着した。そして、ホタンを拠点として、アクスー往復などを試み、タクラマカン砂漠の探検を続けた。これらの調査・探検が終了すると、カラコルム山脈を越えてインドに出た⁽⁴⁵⁾。

続く第3回探検(1913～1916年)は、前半は前回とほぼ同様のコースで実施した。とくに敦煌の発掘には力を注ぎ、秘宝遺書などを多数収集した。その後、さらに探検の範囲を拡大した。すなわち、東はモンゴル西部から西はパミール高原にも及ぶという拡大なものとなった。その中でもシスターン地方のコヒ・フワジャ発掘などにみられるように、古代道路の解明に努力した⁽⁴⁶⁾。このことが、その後のスタインの研究・調査のテーマとなるのであるが、彼の視野をアレクサンダー大王の東征と西アジア世界に向けさせる原因となった。

以上主として19世紀後半以降中央アジア探検に貢献した探検家のうち、代表と看做される探検家数人にしぼり、論を展開してきた。その結果、大局的には、本稿でとりあげたセミョーノ

フ・プルジェヴェリスキー・コズローフ・ヘディン・スタインがそれぞれ実施した探検での成果によって、中央アジアにおける「テラ・インコグニタ」の解明が進展したと結論づけられる。しかしながら、これらの探検家以外にも、例えば、トルファンからクチャにかけて四回にもわたって実施されたドイツ探検隊⁽⁴⁷⁾の中心メンバーであるグリュンウェーデル(Albert Grunwedel, 1856-1935)、ル・コック(Albert von Le Coq, 1860-1930)、さらには、スタインとほぼ同時代にフランスも中央アジアに探検隊を送ったが、その隊長を努めたペリオ(Paul Pelliot, 1876-1945)などがあげられる⁽⁴⁸⁾。後者のペリオは、多数の敦煌文書を発見・収集したことで非常に有名となった探検家である。

この他、中央アジア探検に忘れてはならないのは、日本人探検家である。例えば、秘境チベットに潜入した河口慧海・青木文教、シルクロード探検で顕名な大谷光瑞・橘瑞超を中心とする大谷探検隊などを筆頭に、数多くの探検家が存在し、中央アジア探検史に関してはそれぞれ輝かしい業績・成果をあげている⁽⁴⁹⁾。これら日本

(45)第2回探検は、次の報告書として刊行されている。

Stein, M. A. "Serindia, Detailed Reports of Exploration in Central Asia and Westernmost China" vol. I - II, Texts, vol. IV plat, vol. V Map, Oxford at the Clarendon Press, 1921.

(46)第3回探検は、次の報告書として刊行されている。

Stein, M. A. "Innermost Asia, Detailed Report of Explorations in Central Asia, Kansu and Eastern Iran" vol. I - II, vol. III Plat, vol. IV Map, Oxford at the Clarendon Press, 1928.

なお、この他スタインに関しては次の書物が翻訳されている。

Stein, M. A. "On Ancient Central-Asian Tracks" London, 1933, 沢崎順之助訳『中央アジア踏査記』(西域探検紀行全集8)白水社、1966など。

(47)第一次探検(1902～1903)はトルファン・カラコーショ・アギス、第二次探検(1904～1905)はトルファン・ハミ、第三次探検(1905～1907)はクチャ・トルファン・ハミ、第四次探検(1913～1914)はクチャな

どをそれぞれ拠点として行なった。なお、グリュンウェーデルは、このうちの第一次と第三次探検に、ル・コックは第二次と第四次のそれぞれの探検に参加した。

(48)ドイツおよびフランスが相次いで中央アジアに探検隊を派遣することになったのは、次のような経緯が存在した。すなわち、1902年にドイツのハンブルグにおいて開催された第13回国際東洋学会で「中央アジアおよび極東の歴史学的・考古学的・言語学的・土俗学的研究の国際学会」の成立が決議された。かかる学会の最初の事業が中央アジアに派遣されたドイツ探検隊であった。また、フランスにおいても、この新しい学会の支部ができ、1905年に、かかる新設学会を中心に文部省・歴史学アカデミー・地理学協会などの協力により、中央アジア探検が実施されることになった。

(49)これら日本人探検家・冒険家の概要を要領よく整理した書物としては、次の著作があげられる。

長沢和俊『日本人の冒険と探検』白水社、1973、283～415ページ。

人による中央アジア探検の特色は、当初においては明治以来の日本の大陸政策の影響などもあり、荒尾精・向野堅一に代表される軍人などによる探検・調査が主体であった。しかし、その後上述したように、インドでは散逸してしまっているサンスクリット語で書かれた經典などを求めて、チベットに向かう僧侶たちによる探検も増加してきた点であると思われる⁽⁵⁰⁾。

3. 「ロプ・ノール」論争

「ロプ・ノール」に関する多くの探検家の間で論じられた論争を検討する前に、「ロプ・ノール」が位置する中央アジア全般にわたる自然現象についての論争から論を展開していくことにする。理由は、中央アジアの自然環境——とくに有史以来——がどのように形成されたかについて、相異なる見解が存在するからである。つまり、その立場のどちらか一方をとることによって、「ロプ・ノール」問題に関しても微妙に影響を与えると思われるからである。

中央アジアといえば、地球上において非常に稀にみる広大な砂漠を主体とする乾燥地域が卓越しているという独特な自然環境が非常に注目

される。このような乾燥地域としての中央アジアに関して、はるか昔の地質時代はさておき、有史時代においても継続して気候乾燥が進展したという気候乾燥化説と、少なくとも有史時代においては、気候は変化しなかったつまり気候不変化説が対立し、論争されてきた。

かかる論争に関して、前者の立場を最初に唱えたのは、クロボトキン (Pyotr Alekseevich Kropotkin, 1842—1921) などロシアの地理学者であった⁽⁵¹⁾。しかし、研究者間で大きな影響を与えたのは、クロボトキンに代表されるような単純な気候乾燥化説ではなく、その後に発表されたハンチントン (Ellsworth Huntington, 1876—1947) による仮説である。ハンチントンは、1904年にアメリカ探検隊の一員としてタリム盆地 (タクラマカン砂漠) の調査に参加した。そのときの調査経験などを踏まえて提唱したのが、乾燥期と湿潤期が周期的に繰り返すという雨量脈動説と称される仮説であった。すなわち、タリム盆地の気候には、乾燥期 (3～6世紀)、湿潤期 (9～16世紀)、乾燥期 (それ以降現在まで) の降水量の大きな脈動が想定されるとしたのである⁽⁵²⁾。

(50) 以上述べたように、多数存在する日本人探検家による中央アジア探検史に関しては、資料を収集した後、稿を改めて論じたいと考えている。

(51) Kropotkin, A. "The desiccation of Eur-Asia" *Geographical Journal* 23-6, 1904, pp722~741

(52) ハンチントンのかかる仮説は、次の書物などにみられるように、一般には気候乾燥化説と称されることが多い。しかし、ハンチントンの説は、クロボトキンの仮説を継承しているが本文に示したように、正確には気候乾燥説とはいえない。

原随園監修、羽田明・日比野丈夫・西村睦男『新講座 地理と世界の歴史、アジア篇下』雄渾社、1956、23ページなど。

ハンチントンは雨量脈動説の論拠として、次の四つを掲げている。

①タリム・ニヤ・ケリヤなどの諸河川沿いに位置する

砂漠中には、かつての集落の廃墟が多数存在する。しかし現在では、これらの近くには水がなく、河川から水を引くことが不可能な場所である。

②山麓から砂漠周辺に生育している樹木・植物が次第に枯死する傾向がみられる。この場合、樹木・植物が砂に埋められたためとも推定できるが、これらの樹木や植物は砂に埋れても生育することができるので、砂が直接の原因とは考えられない。

③山麓周辺に位置するオアシスについて、これらのオアシスが以前存在したことを知っているが、現在ではまったく消滅しているものが多い。

④「ロプ・ノール」がかつてかなり大きな湖であったことが、古地図および古汀線から推定できる。

Huntington, E. "The pulse of Asia" Boston & New York, 1907.

一方、この仮説に対して、水系・湖面の変化、樹木の枯死、集落の盛衰などは、気候の変化を前提に考えなくてもよいとする主張をおこなったのがヘディンであった。すなわち、ヘディンはすくなくともタリム盆地の気候は1,600年間著しい変化があったとは認められないと論じたのである⁽⁵³⁾。その後、スタインもニヤ遺跡などの発掘を行なった経験から、砂漠に埋れた集落の古いものでも(1,600年ほど前)、建築材料・垣根・果樹園などが今日でも明白に区別できることに気づいた。それ故、かかる事実は、町の滅亡直前もそれ以降も現在と同じく乾燥していたことに他ならないと論じた⁽⁵⁴⁾。

以上論じたように、両仮説は、本稿でとりあげた以外にも多数の探検家、研究者を巻き込み論争が続けられた。現在では、前者の気候乾燥化説はほとんど反駁のうき目に会っているという⁽⁵⁵⁾。つまり、中央アジアにおける集落の盛衰、樹木・植物の枯死などの現象は、乾燥に代表される気候変化を前提にしなくても、砂丘の移動から証明した方が合理的であるとする立場が主流となってきている。しかし、その中でも、雨量脈動説に関しては、それ自体が否定されたものではなく、わが国でも保柳睦美などはかかる立場を支持している⁽⁵⁶⁾。次に、以上の両説を踏

まえて、「ロプ・ノール」論争を検討していくことにする⁽⁵⁷⁾。

「ロプ・ノール」の位置に科学的な観点から注目したのは、プルジェヴァリスキーであった。彼は既述したように、第2回探検つまり「1876年から1877年にかけてクルジャから天山を越えてロプ・ノールとアルティン・タークを目指す」探検において、「ロプ・ノール」を発見したのであった。すなわち、プルジェヴァリスキーは、この探検において、タリム川が東流していないという事実を発見したのであった。というのは、タリム川が東南および南に曲流し、その末端部においてカラ・ブランとカラ・コシュンと呼ばれている二つの湖(双湖)を形成していることが判明したのであった。この双湖を「ロプ・ノール」と同一の湖であると看做したのであった。さらに、その位置は、中国で出版された地図において以前より知られている位置よりも南に約一度下っていることも発見した⁽⁵⁸⁾。

このプルジェヴァリスキーの見解に対して、リヒトホーフェンは、プルジェヴァリスキーが実施した上述の第2回探検は近代において企画された探検の中でもっとも重要なものであったと看做したうえで、次のような批判を行なった⁽⁵⁹⁾。すなわち、プルジェヴァリスキーが発見

(53)前掲(31) Hedin, S. (1904-1907) vol.2, pp353-360

(54)Stein, M. A. "Innermost Asia; Its Geography as a Factor in History" Geographical Journal LXV-5, 1925, pp378-403, LXV-6, pp473-501, なお本論文は、詳細な注記付きで次の書物の中にほぼ全訳されている。

保柳睦美『シルクロード地帯の自然の変遷』古今書院、1976年、160~212ページ所収、195~199ページ。

(55)前掲(52) 原随園監修、羽田明・日比野文夫・西村睦男編 (1956) 23ページ。

(56)前掲(54) 保柳睦美 (1976) 53~125ページ。

(57)以下本文の「ロプ・ノール」論争に関しては、ヘディンの非常に詳細な解説が存在する。それ故、とくに断らない限りそれを参照した。

前掲(27) 鈴木啓造訳 (1975) 294~353ページ。

(58)プルジェヴァリスキーの立場は、次の書物に詳しく示されている。

前掲(21) 中野好之訳 (1967)。

(59)ヘディンによれば、リヒトホーフェンは、プルジェヴァリスキーが帰還した年度に中国調査に出かけたと記している。この調査・探検は、1868年から1872年にかけて合計7回にわたって実施された中国国内調査を指すものと思われる。プルジェヴァリスキーに対する批判は、かかる探検・調査の結果より得られた資料などをつかって行われたものと思われる。そのときの中国に関する探検・調査は、次の大著として刊行されている。

前掲(2) von Richthofen, F. (1877-1912)。

した「ロプ・ノール」は、中国の古典に出てくる菖蒲海つまり塩沢ではなく、新しく形成された湖であると強く主張した。つまり、河川の末端部に形成された湖であれば、河川が数千年の間砂漠・ステップなどを流れ続けていると、その湖には絶対塩分が含まれていなければならない。それ故、湖は塩湖であるはずとした。それだからこそ、古代においても塩沢などと称されていたのである。したがって、プルジェヴァリスキーが発見した湖は、度々流路を変更してきたタリム川が以前の末端部に形成した貯水池(湖)を捨てて、比較的新しいところに流入して形成された別の末端湖であると解釈した。また、プルジェヴァリスキーは、タリム川の種々の支流の間を探検・調査したが、一本の支流を注意しなかった。その支流は東流し、末端部が砂漠内部で湖となっているが、この湖こそが真の「ロプ・ノール」であると結論づけた⁽⁶⁰⁾。

上述のリヒトホーフエンの反論に対して、プルジェヴァリスキーも直ちに反駁を加えた。すなわち、「ロプ・ノール」の位置に関する従来の説はすべて、中国人自身ももっていた誤った不正確な情報に負っているとした。そして、リヒトホーフエンがいうように、他に一本の支流が存在することは絶対はないと言い張った。その理由として、当地域に居住している原住民たちも、これ以外の河川がないといっていることをあげた。さらに、カラ・コシュンが淡水湖であるのは、タリム川の水が直接流入するからであるとした。

以上論じたように、プルジェヴァリスキーとリヒトホーフエンとの間で戦わされた論争は平行線をたどり、結局、「ロプ・ノール」問題は未解決のままであった。すなわち、プルジェヴァリスキーが強く主張する「ロプ・ノール」であるというカラ・コシュンは、新しく形成された湖であり、「ロプ・ノール」ではなかった。しかし、砂漠の東部に位置する湖に支流が一本も流れ込んでいなかったという点に関しては、プルジェヴァリスキーの調査報告が正しかった。

かように、「ロプ・ノール」問題は未解決の状態であった。そこで、かかる問題をフィールドサーヴェイによって解決しようとしたのが、リヒトホーフエンの高弟ヘディンであった。その探検がヘディンの第1回中央アジア探検(1893~1897年)である。その結果、リヒトホーフエンが唱えるのとは逆に、砂漠の中へ支流が一本も流れていないことが判明した。その代わりに、タリム川の諸支流が貫流している一連の湖を発見した⁽⁶¹⁾。ヘディンは、これらの一連の湖を旧「ロプ・ノール」本来の姿が変形した最終的な残留部であると推定した。しかも、その位置は、タリム川の下流でちょうど中国の古地図に描かれている場所に該当した⁽⁶²⁾。ヘディンは、この探検の成果を1897年10月27日、セント・ペテルスブルクで開催された「ロシア帝室地理学会」で講演した。勿論、リヒトホーフエンもこの発見に関して大変喜んでくれた。

ところが、前述のヘディンの見解に反対する

(60)ヘディンの記述(前掲(27) 鈴木啓造訳(1975) 314ページ)による。しかし、リヒトホーフエンが、このようにプルジェヴァリスキーを批判したという原典は管見ではみあたらなかった。ヘディンが書いたリヒトホーフエン伝などを参照すると、「ロプ・ノール」に関する論文は完成されていないと述べている。それ故、「ロプ・ノール」に対するリヒトホーフエンの見解は、ベルリン大学留学中に出席した講義などで聞いたので

はないか、と思われる。

前掲(28) 高山洋吉訳(1941) 88ページ。

(61)北緯40度50分付近に位置するアヴル・ケル(Avullu-kol)、カラ・ケル(Kara-kol)、タイエク・ケル(Tayek-kol)、アルカ・ケル(Arka-kol)の四湖であった。

(62)このときの様子は、次の著作に詳しい。

前掲(30) 横川文雄訳(1964)。

探検家が出現した。プルジェヴァリスキーの弟子にあたるコズローフであった。コズローフも、ヘディンと同じ年の1893年から翌年にかけて「ロプ・ノール」が存在するとされるロプ砂漠北部を中心に探検を行なった。そのときの探検でコズローフは、タリム川左岸で原住民である東トルコ人達がクルク・ダリヤすなわち「乾いた川」と呼んでいる乾上がった旧河床を発見した。このクルク・ダリヤは東に迂回してカラ・コシュンに注いでいると主張した。そして、カラ・コシュンが「ロプ・ノール」であるばかりではなく、中国の古地理学者のいう、古い歴史的な真の「ロプ・ノール」（菖蒲海）であると唱えた。つまり、コズローフは恩師プルジェヴァリスキーの名誉を強く擁護しようとしたのである。

しかし、かかるコズローフの主張は、3年後軽率であったことが判明した。すなわち、ヘディンが再度1900年にこの議論的になっている地域を探検した。その結果、クルク・ダリヤの旧河床は非常に大規模なので、昔はタリム川全体の水が流れるのに充分であったことが判明した。また、クルク・ダリヤの旧河床は、コズローフの主張するように、カラ・コシュンに達しているのではなく、広大な面積をもつ盆地に終わっていることも分かった。さらに、楼蘭とカラ・コシュンの北端の湖岸との間の比高は、2メートル強であることも発見した。

以上の入手した資料から、ヘディンは次のような結論に達した。すなわち、当地域のように砂漠の表面があたかも海面のように平坦地が卓越する場合、そこを流れる水は地表のほんのわずかな変化に対しても極度に敏感となり、流路を変更するということである。ここで問題となっている有史以来（約1,500年間）という歲月ぐらいでは、地質学的に言えば非常に短い時間に該当する。それ故、地殻の変動が原因で生じる

100年単位の地表変化が起こることは考えられない。つまり、末端湖が砂漠の北と南の窪地の間を周期的に移動するのは、地殻変動よりも地表の変化であると考えたのである。かかる点を具体的に指摘すると、クルク・ダリヤの乾上がった旧河床から考えると、以前タリム川はそこを流れていたことが明白で、「ロプ・ノール」はロプ砂漠地方の湖底盆地に形成された。その後、タリム川の河道変遷によって、タリム川はロプ砂漠の南部に末端湖を形成した。この末端湖が現在のカラ・ブランとカラ・コシュンと称されている双湖なのである。

このように、タリム川の調査が有史以来において変遷したために、湖の位置も移動したとヘディンは考えたのであった。その原因は、第一に、有機物および無機物を問わず、流水による固体の不断の流入の結果から生じる推積と、第二に、地面を侵蝕し、その破壊力によって固体成分をも崩して運び去る風の作用によると看做した。すなわち、砂漠の南部に位置していた双湖は、タリム川の河泥および風によって運搬される砂や土埃によって埋没する一方において、北部の砂漠地帯は途方もなく激しい東北東の嵐によって地面が鋭くえぐられていく。その結果、小さな湖がいくつも形成されることになる。ヘディンが1900年および1901年に発見したのは、これらの湖である。その後、同様の作用が逆に進行する。つまり、北部の砂漠地帯にあった一連の湖が土砂で埋もれ消失する一方で、タリム川の河床が変動することによってかつて双湖が存在していた場所に、再度湖が形成されたのである。ヘディンは、かようにして、「ロプ・ノール」が南北に移動すると考え、「さまよえる湖」と命名したのであった。

以上のヘディンの推測に対して、反論を唱えたのがスタインであった。スタインは、ヘディ

ンがいうクルク・ダリヤのデルタにおいて、地図測量などの調査を実施した。しかし、「ロプ・ノール」の痕跡を発見することができなかった。しかも、ヘディンが主張するような学説は、中国の文献には記されていないと断言した。

しかし、かようなスタインの反対意見に対して、ヘディンが1934年に実施したロプ地方の探検（第5回中央アジア探検）での成果によって、「ロプ・ノール」論争は完全に結着が付いたと考えられた。その理由は次のような経緯からであった。

すなわち、既に論じたように、ヘディンは第5回中央アジア探検を実施する前に、第4回中央アジア探検を行ない、多大の成果をあげていた。その第4回中央アジア探検の拠点の一つであったトルファンで、周辺地域の旅行経験の豊富な商人から聞き取りをしているとき、1921年にタリム川末端の河道が、それまで流れていたコンチェ・ダリヤからクルク・ダリヤに代ったという話を聞いた。ということは、それ以前まではタリム川の末端は南流していたが、東流し始めたということになる。かかる流路の変化は、ヘディン自身が約30年前に推定した仮説が実現したものであるといえた。ヘディンは、その喜びを「1896年以来、わたしはロプ・ノールの地理学的問題に奪われてきた。その北岸に沿い、クルク・ダリヤに沿って古代のシルク・ロードは走っていた。楼蘭（ロウラン）はこの地方におけるその中心地であった。河と湖が紀元後330年頃に南に移ると、シルク・ロードは断ち切れ、楼蘭は見捨てられ忘れられてしまった。

いま、水は旧河床に戻って来て、歴史的意義をもつ新たな展望がわれわれの眼前にくりひろげられたのである⁽⁶³⁾。」とその著書に記述した。

しかし、東洋人の口頭による説明のみでは確実とはいえない。つまり、東洋人はあふれんばかりの空想力があって、彼らにとって真実とは極めて柔軟性に富んだ概念であるという印象を強くもつヘディンは、自身の眼をもって、かつ自身の道具を使って本当に事実かどうか調査・探検する必要を感じた。そこで、翌28年、隊員の地質学者エリック・ノーリン博士らを現地に派遣し、かかる事実の確認に当たらせることにした。エリック・ノーリン博士らは、クルク・ダリヤ（現地に居住する東トルコ人は「砂の川」という意味をもつクム・ダリヤとも称している）には確かに水が流れているということを発見した。しかし、クルク・ダリヤの末端が楼蘭の北で内陸デルタに分岐しており、新しくできたといわれる「ロプ・ノール」には達することができなかった⁽⁶⁴⁾。その後、既述したように1934年には、ヘディン自身が探検のためにカヌーに乗り込んでクルク・ダリヤを下った。そして、ついにヘディンは新しい「ロプ・ノール」に到着することに成功し、自身の説が正しかったことを自ら証明してみせた。

かくして、「ロプ・ノール」論争は完全に結着が付いたかに思われた。しかし、タリム川の河道の移動に関しては、有史時代における氷河の拡大・縮小などをもたらした気候変動が、河川の水系の変遷にも一役を担っていたと強く主張する、いわゆる気候変動説の立場を堅持する研究者⁽⁶⁵⁾

(63)前掲(27) 鈴木啓造訳 (1975) 326ページ。

(64)その後、隊員のヘルナ博士とC. 陳によって、新しい「ロプ・ノール」周辺の測量が実施された。その測量から得られた成果を盛り込んだ地図は、原書には挿入することができなかったが、次のイギリス版などに

は付図として載せることができた。

Hedin, S. "Across the Gobi Desert", 1931, London.

(65)前掲(54) 保柳睦美 (1976) 104～111ページ。

なども存在し、ヘディンの説がすべての研究者に承認されたものではなかった。

4. ヘディンのみた「ロプ・ノール」

前章では、「ロプ・ノール」に関して種々の探検家の見解をやや詳しく検討してきた。その結果、最終的にはヘディンの説でかかる論争は結着が付いたかにみえた。ヘディン自身も、中央アジアに関する最後の探検となる第5回中央アジア探検の結果、自らがカヌーを操り、タリム川を下ることでロプ砂漠北部に位置する、新しい「ロプ・ノール」に到着することができた。ヘディンは、この「ロプ・ノール」をどのように感じたのであろうか。ヘディンの探検報告書⁽⁶⁶⁾の中から該当する箇所のごく一部を抜き出し、そのアウトラインを紹介しておこう。というのは、とくにわが国において、「ロプ・ノール」論争は、楼蘭などをはじめとする遺跡の発見・発掘とともに、研究者は勿論のこと、多くの人々の眼を中央アジアに向けさせることになったからである。

「ロプ・ノール」探検の出発点は、天山南路の中心都市コルラである。コルラから、既述したように現地ではクム・ダリヤと呼ばれているクルク・ダリヤをカヌーで下って行くのである。カヌーは二隻準備され、漕ぎ手三人がいる大きいカヌーには同行者のC. 陳が、漕ぎ手二人の小さいカヌーにはヘディンが乗船した。「ロプ・ノール」にもっとも近いキャンプとして、第82キャンプを設営した。

1933年5月16日早朝、第82キャンプから出て周辺を見回すと、南西には「ロプ・ノール」の北端部が海湾のように広がっているのを発見し

た。「ロプ・ノール」は、カモメが湖面を飛び回っているためか、海浜にいるような錯覚におちいった。しかし、視界には一本の草木もなく、すべて死に絶えて荒涼としていた。

ヘディンの計画では、湖面にカヌーを漕ぎ出して、東岸をたどり南に進み、南部にある大きな内湾を横断し、西岸沿いに北へ戻るというものであった。湖を一周する目的は、新しい「ロプ・ノール」が3年前にヘルナー博士とC. 陳が製作した地図とでは形を変えているかどうか知ることであった。

はじめて「ロプ・ノール」に漕ぎ出したときの印象をヘディンは、「今までに一隻のボートもすべり込んだことがない平和な湖に、何という童話的なムードが漂っているのだろう。今大気はまったく動かず、水面はまるで鏡のようだ。少し離れたところでは鴨が泳いでいる。カモメやその他の海鳥は警告の呼び声を出し合っている。南東にひと続きの黒い球のようなものがみえる。それは、多分防波堤の形をした岬の上の凹凸のようである。蜃気楼のために、それらは水平線上にちらちら見えるのであって、この現象にはゴビ砂漠以来我々にはおなじみの風景であった。真南と南西では、水平線は完全にからっと開けていた。そこでは、空と水とが、広々とした海原と同様に相対していた。南東南では、ツェッペリン飛行船が「ロプ・ノール」上空を列をなして逃走中であるかのようにみえた。少し近づくと南東に、騎馬や草を食べている家畜やラクダに似た黒い隆起物がはっきりと眼に入ってきた。しかし、それらの動きは、暖められて上昇する大気によって生じるチラチラする振動であった⁽⁶⁷⁾。」と表現し、発見の成功を非常に喜んだ。また、「ロプ・ノール」の北部の水を

(66)前掲(38) Hedin, S. (1943-1944) Part III pp176-194.

(67)前掲(38) Hedin, S. (1943-1944) Part III p180.

飲んでみると、真水であることも発見した。つまり、「ロプ・ノール」は砂州によって南と北に分断され、北部では、淡水、南部では海水であることも判明した。しかし、かかる砂州の部分は、水深が七センチほどで非常に浅い。それ故、カヌーでの航行は不可能となった。すなわち、湖全体の探検は、増加した水が「ロプ・ノール」に注ぎ込み、湖の北部が航行可能となる晩秋でなければだめであることも分った。

さらに天候も悪く、嵐の状態となってきたし、クルク・ダリヤの水量も日増しに少なくなり、「ロプ・ノール」の水位も益々下ってきた。そのため、「ロプ・ノール」でかなり長い時間探検したいという希望は実現できなかった。

その後一行は、水路楼蘭を目指してカヌーを進めた。

5. 結 語

中央アジアは、地球上においても最後まで「テラ・インコグニタ」の一つであった。しかし、本稿で論を展開してきたように、1930年代を一応の区切りとして、我々の主張する「探検」の時代は終了したと思われる⁽⁶⁸⁾。中央アジアにおける最後の「テラ・インコグニタ」に関する探検の目標の一つ——ある面では最大の関心事

と思われる——が、本稿で論じてきた「ロプ・ノール」問題だったのである。かかる問題に関して、再度要約する余裕をもたないが、現在ではどのように考えられているかを述べて、結語に代えることとする。

ヘディンの第五回中央アジア探検などを最後に、中国は戦争に巻き込まれた。それに伴い、中央アジア探検は空白の時代を迎えることになった。その後、中央アジア探検に着手したのは、新しく成立した中華人民共和国の成立後であった。しかしながら、中華人民共和国が社会主義体制を採用したことなどから、外国人の探検は不可能となり、専ら中国人研究者による探検・調査が実施されてきた。本稿の主題である「ロプ・ノール」に関しても、第二次世界大戦後には、中国人研究者による探検・調査のみの時代が続いた⁽⁶⁹⁾。

上述した第二次世界大戦後に発表された中国人研究者による「ロプ・ノール」に関する研究成果等を参照すると、本稿で検討してきた、ヘディンが自ら実施し解決したかにみえた「ロプ・ノール」が南北に移動する、つまり「さまよえる湖」であるという学説は、積極的な意味をもたないように思われる。すなわち、ヘディン説は崩壊してしまったような印象を強く受ける。というのは、1980年から1981年にかけて新疆科

(68) すなわち、ヘディンの第五回中央アジア探検を境にして、いわゆる徒歩とラクダによる探検が終わり、自動車を中心とする機動力を駆使した近代的な調査へと進展していくのである。このように、探検・調査の手段が大きく変化すると同時に、地理学者あるいは地理学的な知識が重視された、いわゆる「地理的探検」時代から、例えば、考古学的あるいは民族学（文化人類学）的知識を身に付けた研究者が調査に従事するということに、中央アジアの調査も、個々の学問領域の調査・研究を主体としたものに変化していった。自動車などの機械力を使用したものとしては、次の調査旅行などがあげられる。

Latimore, O. "The desert road to Turkestan"

Boston, 1930, 谷口陸男訳『西域への砂漠の道』（西域探検紀行全集 12）白水社、1967年。

Le Fèvre, G. 《La Croisière jaune, troisième mission Haart-Audouin-Duhreuil》 Librairie Plon, 1933, 野沢協・宮前勝利訳『中央アジア自動車横断』（世界探検全集 13）河出書房新社、1978など。

Teichman, E. "Journey to Turkistan" London, 1937. 神近市子訳『トルキスタンへの旅』岩波書店（岩波新書）、1940。

(69) その代表的な成果が次の書物である。

中国科学院新疆分院羅布湖綜合科学考察隊編『羅布湖科学考察与研究』科学出版社、1987。

学院の「ロプ・ノール」考察隊が、ロプ・ノール地区の調査を実施した結果、当時、ヘディンが発見し、自らもカヌーで湖面を航行した「ロプ・ノール」には水がまったく存在しないことが判明した。しかも、この点もヘディンが強く主張したのであるが、「ロプ・ノール」は「さまよえる湖」ではなかった。

すなわち、「ロプ・ノール」の湖面は、気候変化あるいは地殻変動で拡大あるいは縮小したのは事実である。そのため、湖面が時には南に寄ったり北に寄ったりしたが、本来の湖の範囲を越えて移動しなかったのである。かかる点は、「ロプ・ノール」の湖底をボーリング調査し、地質標本を採集したところ、各地層から水生植物の孢子が発見されたことなどから、「ロプ・ノール」は一度も移動していなかったことが、科学的に証明されたのである。

さらに、現在「ロプ・ノール」の湖面に水がまったくなくないことは、砂漠などの気候の変化によるものではなく、上流にダムなどが建設されたため、水流が分断され、水が湖に流入してこなかったことが主原因であるという。かかる点に関しては、中国中央電視台と日本放送協会が共同製作したテレビ番組のための取材記録で、

「今日、ロプ・ノールが徹底的に涸渇してしまった原因について、私（屠国壁—筆者註）はやはりその水源と関係があると思う。その大きな水源だったタリム河の沿岸では、今、開墾と農耕が行われている。これまでの広漠たる砂漠が今水路織りなす食糧基地となっている。タリム河の流域地帯では、各地で流れを断って農業用水として使っている。そのため下流の水量が減ったうえ、蒸発と地下への滲水は相変わらず大きいから、湖に流入する水はもはやないのである⁽⁷⁰⁾。」と述べられているように、明確に知ることができる。

かくして、現時点においては、1930年代前半まで多くの中央アジア探検家を巻き込んだ「ロプ・ノール」論争に関して、科学的な調査が実施され結着が付いたといえよう。しかしながら、有史以来における「ロプ・ノール」の移動に関しては、本来の湖の範囲を越えて移動しなかったことは事実であると思われるが、本当に上流につくられたダムやそれに伴う灌漑用水の利用などによる人為的な理由だけが原因であるとい切れるだろうか。若干、疑問が残るところである。再度、科学的な調査が切に望まれる⁽⁷¹⁾。

(70)屠国壁、田川純三訳『楼蘭王国に立つ』日本放送出版協会、1984、316ページ。

(71)なお、本稿でとりあげたヘディンをはじめとする外国人の中央アジア探検家に関しては、次の書物で論じられているように、探検途中で発見・発掘した秘宝を無断で国外に搬出したことも事実で、中国からは強い抗議が行われている。このような問題が生じているこ

とは充分承知しているが、本稿では、「ロプ・ノール」論争に焦点を合わせて論を展開したため、かかる点に関しては意識的に論じることを避けた。

Hopkirk, P. "Foreign Devils on the Silk Road" John Murray, London, 1980. 小江慶雄・小林茂訳『シルクロード発掘秘話』時事通信社、1981。